

序論

中澤克昭

1 「城と聖地」論のアウトライン

(1) 皇国史観と戦後歴史学

在地領主と地域の信仰の場との関係について考えようとする時、戦時体制下で実証的な研究を続けた奥田眞啓の連の論考を見逃すことはできない。一九四一年に、「武士の氏寺の研究」と題する長大な論文を発表しているのとおり、寺院との関係についても詳細に調査していた奥田だが「奥田一九四二」、一九三九年に刊行された初めての著書のタイトルが『武士團と神道』だったのは、やはり時局の制約があったのだろう。しかし、そのサブタイトル「武家神道の社会的研究」に偽りはなく、隅田党と隅田八幡宮の研究に代表される中世武士團と神社との関係を探った論考の数々は、思想や信仰が在地領主の社会的な基盤であったことを描き出している「奥田一九三九」。

大類伸との共著『日本城郭史』をはじめ、城に関する数多くの著作で知られる鳥羽正雄は、一九四一年に「敬神崇祖と城郭」と題する論説を発表していた「鳥羽一九四二」。鳥羽は、一九三六年に神宮皇學館教授から内務省神社局考証官に転じ、一九四〇年の皇紀二六〇〇年記念に際して神社局が神祇院に昇格すると、引き続き同院の考証官をつと

めた(鳥羽正雄先生略年譜と著作目録)『中京大学教養論叢』第一五卷第一号、一九七四年)。「敬神崇祖」は、神社局・神祇院のスローガンそのものであったから、鳥羽の「敬神崇祖と城郭」は城郭史研究が皇国史観にからめとられようとしていたことを如実に示すものと言えよう。ただ、鳥羽があげている城内に祀られる神仏や城と結び付いた寺社の事例は、城と聖地の関係を考える上で興味深いものばかりである。

奥田の『武士團と神道』が他の論考とあわせて『中世武士團と信仰』として再刊されたのも、鳥羽の「敬神崇祖と城郭」が『日本城郭史の再検討』に再録されたのも一九八〇年のことであつた(奥田一九八〇、鳥羽一九八〇)。皇国史観と対峙し、「科学的」な研究を標榜した戦後歴史学において、戦前・戦中に発表された奥田や鳥羽の論考は好まれなかつたのだろうが、そもそも戦後の日本中世史研究は、領土制論を基調としながらも、奥田のように神仏に対する信仰を在地領主の社会的な基盤のひとつとみる視座を欠いていたのではないだろうか。「伊勢神宮と武家社会」をはじめ「河合一九五五」、中世武士の「精神生活」に関する論考を発表した河合正治などは例外的で、在地領主の拠点と地域の信仰の場との関係を問おうとする研究はほとんどなかつたと言つて良いだろう。河合にしても、一九六〇年代以降は、武士の「教養」や狭義の「文化」の研究に向かつてしまったように見える(河合一九七三)。

(2)「社会史」とともに

網野善彦『無縁・公界・楽』の増補版が刊行された一九八七年、市村高男は網野が多用した「都市的な場」と城館とを「聖域」という特質で結び付けようとする発想のもとに、中世前期の「城郭」は「寺院・神社の境内などを意識的に占拠する形で構えられる場合が多く、占拠する空間Ⅱ「場」を一種の「聖域」としようという意図を読み取るこ

とができる」と指摘した(市村一九八七)。短い文章で発表されたこともあつて、その後の研究ではあまり参照・引用

されていないが、城と聖地の関係を考える研究の先駆として忘れることはできない。

一九九〇年には網野と石井進が、北海道上ノ国の勝山館をめぐる鼎談で、沖繩のグスクが聖地でもあり墓でもあることや、アイヌのチャシも同じような機能を持っていることに言及して、勝山館の聖地性を強調し、日本の城について軍事的な構築物としてとらえるだけでなく、その本質を考え直す必要があると説いた〔網野・石井・福田一九九〇〕。時はいわゆる「社会史ブーム」の真つただ中である。資料(史料)や方法の多様化が進み、城館遺構も中世史研究の資料として脚光を浴びるようになっていたが、縄張りから城をめぐる政治(とりわけ軍事)について考える城郭研究者の多くは、聖地との関係に無関心(あるいは冷淡)であつた。

しかし、中野豊任が、墓・塔婆、出土品などのモノから中世の人々の心意に迫り、古い地名や伝承なども総合して「忘れられた霊場」あるいは「中世の在地霊場」と称される地方の信仰の場を復元したのも一九八〇年代のことだつた〔中野一九八八〕。この地域霊場論の登場によつて、在地領主の拠点と信仰の場との関係もリアリティを増した。後の研究に与えた影響は大きく、特に東北地方では、地域霊場論の方法が着実に継承されていくことになる。考古学の立場からは飯村均が、猪久保城をはじめとする東北地方の事例をもとに城と聖地の関係を論じた〔飯村一九九四・一九九七〕。その後も、東北中世考古学会の『中世の聖地・霊場』〔東北中世考古学会二〇〇六〕や山口博之の『城館と霊場』〔山口二〇一七〕などに結実していく。

筆者も、こうした諸先学の影響をうけ、中世前期の城郭を空間として把握し、山岳修験を中心とする聖地との関係について探つた〔中澤一九九九〕。さらに、二〇〇六年には齋藤慎一が、丹念な現地調査をふまえて中世前期の東国武士の本拠のモデルを提示した。居館のみで論じられがちだつた武家の本拠について、寺院・墓地などの宗教的な装置、道、湧水点、田畠などで構成される空間全体を本拠として捉え、「城とは何か」と問いなおしている〔齋藤二〇〇六〕。

(3) 近年の動向と問題の所在

このように研究が積み重ねられてきたものの、城と聖地の関係をめぐる議論は必ずしも活発ではなかった。たとえば、拙著では籠城主体の心性を描き出そうとしたが、「心性」の説明は曖昧で、聖地の定義もできていない。飯村は、網野・石井と同様、支配の正当化という見方を堅持していたが、筆者の駄文はその点への言及も不十分で、議論を深めることはできなかった。これまでの研究の蓄積も「城とは何か」と問いなおす問題意識も、多くの研究者に共有されたとは言い難い。

二〇一四年の守護所シンポジウムにおいて仁木宏は、武家の本拠地が「山の寺」などの寺院を取り込んでいることについて、軍事的な城郭とするのに適当な場所に先行する「山の寺」があったため、その場を「乗っ取った」と考えることもできるが、武家は「山の寺」がもっていた「遠方からも人々を引き寄せる聖地性」を求めたのではなからうか、と述べている〔仁木二〇一四〕。「軍事的」／「聖地性」の二元論だが、中世社会はいたるところに信仰と呪術が内在していたのであつて、軍事でさえも信仰や呪術と無関係にはありえなかつた〔黒田一九八〇、平一九九二・二〇〇五、久野二〇〇一など〕。そうしたことを前提にして、聖地と城郭の重複、寺社と城館の密接な関係が指摘されてきたのであるし、齋藤が提示した中世前期の本拠のモデルは、守護所や戦国城下町のプロトタイプとみることもできるように思われる。「城とは何か」を問いなおそうとするこれまでの研究がふまえられていれば、「軍事」か「信仰」かといった二者択一的な議論にはならないのではないだろうか。

しかし、この頃から、新たな研究段階を予感させる動向もあらわれる。二〇一四年、滋賀県立安土城考古博物館で特別展「安土城への道―聖地から城郭へ―」が開催された。山岳霊場に築造された城郭に、神仏に対する既存の信仰を取り込み自身の権威を高めて権力を強固にしようとする領主（武家）の「神の権威と格を自分の権威と格にすり替え

る戦略」を読み取り、城郭には軍事的側面だけでなく聖なる山の信仰を包摂して支配を正当化するという側面があることを描き出そうとする刺激的な展示であつた〔安土城考古博物館二〇一四〕。

二〇一五年には竹井英文が、『歴史評論』の特集「歴史学の焦点」に寄稿した「城郭研究の現在」において、「城郭研究の新たな課題」のひとつとして「城とは何か」という問題をとりあげた〔竹井二〇一五〕。「軍事施設」のイメージのみで中世の「城」を語る事ができるのか、という根本的な問いが、ようやく研究課題として共有されようとしている。竹井は、好著『戦国の城の一生』のなかで、城と聖地の関係についても言及し、「個々の聖地の実態、それに対する信仰の実態などを深く掘り下げて検討」する必要性を指摘しているが〔竹井二〇一八〕、そのとおりであろう。中世の霊場に関する研究も進展し、「聖地」と「霊場」の概念区分の重要性が指摘され〔時枝二〇一四〕、地域霊場についても概念規定や類型化も含めて、再検討が必要になっている。

二〇一六年に刊行された齋藤と中井均の共著『歴史家の城歩き』では、城館史研究を牽引する二人が、城を見る際に聖地との関係にも留意するべきだということを確認している。筆者も、あらためてこの問題に取り組み、近世への見通しについてまとめ〔中澤二〇一五・二〇一六〕、齋藤の近業についても批判的に検討した〔中澤二〇一七〕。

2 「城と聖地」をめぐる論点の整理

課題は山積しているが、城館と聖地、領主の拠点と信仰の場との間には、いつからどのような関係があるのか、聖地を包摂することで支配を正当化しようとしたのか、地域の信仰の場を守るのも領主の責務だったのか、そして武家はみずからの本拠に聖地性を求めなくなっていくのか、といった問題にしぼって論点を整理しておきたい。